

論文

# コロナ禍における大学生による地域子育て支援活動に関する学び

—リモート模擬保育を通して—

Learning about local childcare support activities by university students during COVID-19 Pandemic:  
Using the method of remote-controlled simulated childcare

玉瀬友美 (高知大学教育学部)<sup>1</sup>

三ツ石行宏 (高知大学教育学部)<sup>1</sup>

川俣美砂子 (高知大学教育学部)<sup>1</sup>

竹内日登美 (高知大学教育学部)<sup>1</sup>

TAMASE Yumi<sup>1</sup>, MITSUISHI Yukihiro<sup>1</sup>, KAWAMATA Misako<sup>1</sup> and TAKEUCHI Hitomi<sup>1</sup>

<sup>1</sup> Faculty of Education, Kochi University

## ABSTRACT

The purpose of this study was to examine what students learn from community childcare support activities conducted by means of remote-controlled simulated childcare. Since 2015, the Early Childhood Education Course in the Faculty of Education at Kochi University has been supporting local childcare by providing a playground for pre-school children and their parents living near the university. However, due to the spread of the COVID-19, it was decided to conduct simulated childcare activities by remote control. In the remote-controlled simulated childcare, a scenario was created for a community childcare support activity and students acted out their roles. And they wrote a reflection report after the activity. The results of this study showed that students were able to devise environmental configurations in remote-controlled simulated childcare and reflect on community childcare support activities from the perspective of supporting parents as well as assisting children. Therefore, the remote-controlled simulated childcare using the scenario could have been an important learning opportunity for students to support children and parents in the community.

## 1. 目的

少子化の進行ならびに家庭や地域を取り巻く環境の変化を受け、2004年以降にはキャンパス内に子育て支援拠点が設立されるなど、保育者養成課程をもつ大学などが子育て支援活動に取り組むようになってきている(矢萩, 2013)。高知大学教育学部においても、2015年4月に幼児教育コースが開設されたことに伴い、同年5月に幼児教育コース1年生が遊びを企画、実施する地域子育て支援活動「あそぼーや」が始まった。その後2016年4月からは同コース2年生が遊びを企画、実施する「あそぼーや2」、2017年4月からは同コース3年生が遊びを企画、実施する「あそぼーや3」の活動が加わり、大学近郊に住む未就学児と保護者を対象に遊びの場を提供し地域の子育てを支援してきた。

しかし、新型コロナウイルス感染症(以下、COVID-19)の感染が拡大し、2020年度以降に緊急事態宣言が発出されるようになると、保育現場ではできる限り保育を継続することが要請される一方で、保育施設以外の子育て支援施設や児童館、図書館、公園などの利用は制限され、臨時休館や支援事業が縮小されるようになった(小嶋・古田・田中, 2021; 鶴・青木・加藤・森田・岡田, 2021)。このような状況から、本学においても2020年度からは対面形式での子育て支援活動を自粛することとなり、2020年度はそれまでの参加者を対象に学生が作成した教材を送る活動を行った。そして、2021年度は、COVID-19の感染のさらなる拡大をうけて学生の大学への入構が禁止される事態にも至り、対面での地域子育て支援活動が実施できないだけでなく、学生が集まって活動することもできない状況が生じたため、リモート模擬保育活動を行うこととなった。

模擬保育は、大学や短大の保育者養成課程において、教育実習や保育内容あるいは教職実践演習等の授業の一環として広く実施されている(阿部, 2016)。学生がグループになり、指導案を作成し、保育者役や子ども役となって現場の保育を想定した活動が行われ、模擬保育実施後は振り返りが行われる(高原・瀧・矢野, 2016; 田爪・小泉, 2006)。模擬保育において保育者役、子ども役、あるいは観察者となることを通して学生の様々な学びや省察が促されることが従来の研究において明らかにされている(坂本, 2015; 畑・池上・上田・種子田, 2017)。

一方、対面形式ではなくPC画面上で行うリモート模擬保育については、COVID-19の感染拡大に伴い、模擬保育の代替活動として実施されつつある。たとえば、小嶋・堀・金子・野口(2021)は、COVID-19の感染拡大によって中止となった保育実習の事後指導として、Microsoft Teamsを用いて、保育者役と子ども役を交代しながらリモート模擬保育を行い、その後の共同省察を分析することを通して、リモート模擬保育が事後指導として有効な方法であることを示している。

しかし、リモート模擬保育では、保育者役の学生が画面に映る一人一人の子ども役の学生へ声をかけたり身振り手振りを交えて話しかけたり笑顔を向けたりすることはできるが、それはPC画面に映る個々の対象に向けられたものであり、全員の子どもを「画面で一斉に見ることができない」(小嶋ら, 2021)のである。そのため、「子ども同士が遊んでいるところへ声をかけて一緒に遊ぶ」といった複数の子どもの関わり行動はリモート模擬保育では取り上げることができない。集団の中で他児と関わる子どもの姿を読み取り適切に関わることを想定した保育をリモート模擬保育で再現することは難しいといえよう。これに関連して、上田・池田(2021)は、授業の中で保育者役と観察者役に分けてリモート模擬保育を実施した事後のレポートに、「オンラインではコミュニケーションが一方通行であるため、保育者役の意図が伝わらない」ことが述べられていたと報告している。

そこで、本研究では、複数の親子が参加する地域子育て支援活動での保育を想定したシナリオを作成し、学生がそのシナリオで割り当てられた役割演技をしながら進めるリモート模擬保育を実施した。こうすることによって、画面を通して「対面」している一人一人の「子ども」、他児と関わり合えない「子ども」の姿に縛られることなく、保育におけるさまざまな状況を想定することができ、相互に関わり合う子どもや保護者の姿、その時の保育者の対応をイメージしやすいと考えた。

本研究では、2021年度1学期に実施された2年生のリモート模擬保育の振り返りレポートを分析し、シナリオを使ったリモート模擬保育が学生にとってどのような学びとなっているかについて分析することを目的とする。

## 2. 方法

### (1) 調査対象者

4年制大学の教育学部に所属し幼児教育を専攻する2年生で、地域の保育を学ぶことをテーマとする授業を受講した11名を対象とした。地域子育て支援活動「あそぼーや2」は、この授業の一環として実施されている。

### (2) 授業の流れ

表1は、15回の授業の概要を示したものである。授業はMicrosoft Teamsを用いて進めた。

1学期に2回の地域子育て支援活動「あそぼーや2」に関するリモート模擬保育を実施した。オリエンテーション時に、この2回の活動それぞれのリーダーが決められた。リーダーとなった学生を中心として、実施計画書と指導案を作成し、最終的な指導案に基づいてシナリオを作成し、リモート模擬保育を実施し、実施後には振り返りレポートを提出した。従来の対面式での「あそぼーや2」では、学生たちは、全体のテーマを決めてからそれに沿って5つ程度

表1 授業の概要

1回目	オリエンテーション
2回目	実施計画書の作成
3回目	実施計画書の発表
4回目	指導案（第1案）の作成
5回目	指導案（第1案）の発表
6回目	指導案（第2案）の発表
7回目	シナリオ作成
8回目	模擬保育の実施・振り返りレポートの提出
9回目	実施計画書の作成
10回目	実施計画書の発表
11回目	指導案（第1案）の作成
12回目	指導案（第1案）の発表
13回目	指導案（第2案）の発表
14回目	シナリオ作成
15回目	模擬保育の実施・振り返りレポートの提出

※第1～8回目はリモート模擬保育1回目、第9～15回目はリモート模擬保育2回目に関する活動

表2 リモート模擬保育（1回目）活動内容

テーマ：梅雨を楽しもう！	
遊びの内容	活動のねらい
べったんさかなつり	・磁石とクリップがくっつくことを体験し、科学の面白さに触れる。 ・集中力を養い、釣りあげたときの達成感を感じる。
自分だけのカエルマグネットを作ろう！	・色を混ぜ合わせることで色の変化に興味をもってもらおう。 ・掴む、つまむ、たたく、引っ張るなど、手指の運動をする。 ・遊びを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。
みんなであじさいを咲かせよう！	・感じた事や考えた事を自分なりに表現して楽しむ。 ・あじさいをチラシや折り紙、スポンジで作し、素材の違いを感じたり、押す力加減など手指の感覚を養ったりする。 ・季節の花を取りあげることで、自然に生きている植物や花に興味や関心をもつ。
あしたてんきになーれ！～てるてる坊主に願いを～	・自分のオリジナルのてるてる坊主を作ることを楽しみ、飾ったりして楽しむ。 ・細かな作業により指先の感覚を鍛える。
カエルさんを笑顔にしよう	・平均台の上を歩き、バランス力を養う。 ・ボールをつかむなどの手の運動をする。 ・隠れたボールを探すなかで、考察力や観察力を養う。 ・子どもたちの好奇心を促し、目の前に現れた物事に対して挑戦する心を育てる。

表3 リモート模擬保育（2回目）活動内容

テーマ：作って！ 遊んで！ ワクワク夏祭り！	
遊びの内容	活動のねらい
のこったのこった！トントン相撲で対決だ！	・遊びの中で、どのような形、大きさの人形が倒れにくいのか気づいたり、考えたり、予想したり、工夫したりする ・友だちや保護者と遊び、一緒に活動する楽しさを味わう ・ゲームをする上での決まりの大きさに気付く
お面で大変身！？自分だけのお面を作って遊ぼう	・身近な人と親しみ、かかわりを深め、色や形を工夫したり協力したりして、一緒に活動する楽しさを味わう。 ・自分の感じたことや考えたことを自由に表現して楽しむ
目指せ！狙うはタコさんだ！	・感じたことを自分なりに表現しようとする。 ・ルールを守りながら運動することを楽しむ。
オリジナルうちわを作ろう	・自分オリジナルのデザインができることを楽しむ ・鮮やかな色に興味関心を持って楽しむ ・シンメトリーの柄ができることに興味を持つ ・年齢に応じたハサミの使い方に慣れる
リンリン涼しい風鈴作り	・身近な生活用品、身の回りのものに対する興味や好奇心を持つ ・制作を通して音、色、形などに気づき、感覚の働きを豊かにする ・日本の文化（風物詩）に触れる、風鈴が夏の風物詩であることを知る ・鈴の音色を聞いて涼しさを感じる

の遊びのコーナーを作り、各コーナーを担当する2～3名の学生が必要な材料を用意し、コーナーの環境を構成する。そして、参加児は自由に遊びのコーナーを回って遊び、保護者は子どもの近くで見守ったり、一緒に遊んだりし、学生たちは活動のねらいに沿って子どもや保護者と関わるといったものであった。今回のリモート模擬保育では、遊びのコーナーごとに保育者役と子どもあるいは保護者役の学生を決めておき、対面式での「あそぼーや2」活動を想定して事前に作成しておいたシナリオを使って、当該コーナーでの言語的・非言語的やりとりを各コーナー担当の学生たちが演じた。表2と表3は、リモート模擬保育の活動内容を示したものである。

### (3) 倫理的配慮

研究協力者である学生に対しては、研究の趣旨だけでなく、個人情報の管理に細心の注意を払い統計的分析の後には一定期間の管理後にデータを処分すること、学会発表や研究論文による発表以外の目的でデータを使用しないこと、研究への協力が成績評価には全く影響しないことを文書および口頭で説明し、研究協力への書面での同意が得られた者のみを調査の対象とした。

### 3. 結果と考察

本研究では、2回のリモート模擬保育実施後の学生の振り返りレポートについて分析、検討を行う。振り返りレポートは、「今回の『あそぼーや2』で学んだこと、感じたこと、気づいたことについて書きましょう。」という設問に基づいて書かれたものである。1回目、2回目ともに、11名分のレポートが提出された。分析にあたっては、これらのレポートをデータとして、計量テキスト分析の手法(KH Coder, Ver. 3. Alpha. 8)を採用した。計量テキスト分析とは、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析(content analysis)を行う手法である」(樋口, 2014)とされている。本研究では、頻出語の抽出、分析対象ファイル内で抽出語がどのように用いられていたのかという文脈の検索、および共起ネットワークの作成を行った。

#### 頻出語とその文脈

表4は、上位20位までの頻出語リストを示したものである。1回目と2回目において、「子ども」「思う」「シナリオ」「考える」など、共通した語が多くみられる。一方、1回目のリモート模擬保育の振り返りレポートにおいて出現回数が多いが2回目には20位までに出現していない語として「難しい」があげられる。表5は、「難しい」という語が

表4 出現回数の多い語

順位	1回目		2回目	
	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1	子ども	125	子ども	79
2	思う	51	思う	61
3	シナリオ	48	シナリオ	54
4	考える	47	考える	54
5	今回	30	コーナー	42
6	コーナー	29	感じる	37
7	実際	26	今回	26
8	対応	25	実際	22
9	学ぶ	24	良い	22
10	感じる	23	前回	21
11	保育	23	活動	20
12	先生	20	反省	18
13	活動	19	工夫	17
14	姿	17	対応	17
15	行う	16	行う	16
16	関わる	15	作る	16
17	機会	15	保護者	16
18	言葉	15	見る	13
19	難しい	15	声	13
20	自分	14	先生	13

表5 「難しい」が出現していた文脈(リモート模擬保育1回目)

- ・想像することが難しかった面もまだまだあったと思います、実際に子ども達と関わるのが重要だと改めて感じた。
- ・シナリオあそぼーやはもちろん難しいところもあったが、反対に良いところもあったと思う。
- ・実際の子どもの行動は、予測不可能である上、対応が難しい状況にも直面すると考えられる。
- ・対応が難しいと想定される様々な子どもの姿を想定し、それに対する対応を考えていきたいと感じた。
- ・どのような活動はできて、どの活動は難しすぎるというイメージができない状態である。
- ・子どもなど多様な子どもの姿が予想されるため、予想される子どもの姿を想像するのが難しかった。
- ・今回の活動で、リボン結びや自分の名前を書くことが難しいことなどを知った。
- ・今回シナリオあそぼーや2をオンラインで行ってみて、オンラインならではの難しさがあったように思う。
- ・オンラインだったので画面上で紙芝居をスライドさせるのが難しかった。
- ・「難しい」や「簡単」などは保育者が先に言わず子ども自身に発見させた方が良い。
- ・あそぼーや2で感じたことは、子どもの姿の多様性とそれに対する援助方法を考える難しさである。
- ・「これは難しいだろうから、ここから私たちがやろう」など、子ども理解をベースにして、活動を考えた。
- ・自分の実演パートについては、共有スライドの操作に気をとられて実演に完全集中することが難しかったが、何とか終えることができたと思う。
- ・ツアーという言葉が難しいかもしれないことや、肩に手を置くと歩きにくい危険なことなどを指摘していただいた。
- ・子どもの姿を想像しながらシナリオを書かなければならなかったのは難しかった。

出現していた文脈をまとめたものである。表5を見ると、学生はPCの操作の難しさのほかに、子どもの姿を想像することや子どもの行動に対応することに困難を感じていたことが推察される。「多様な子どもの姿が予想されるため、予想される子どもの姿を想像するのが難しかった」「子どもの姿の多様性とそれに対する援助方法を考える難しさ」といった記述からは、困難さを感じると同時に、子どもの姿の多様性、ひいては援助方法の多様性について気づくことができていることが読み取れる。

他者の模擬保育を観察することを通して保育における様々な視点に気づくことや多角的視点からの評価が可能となることが従来の研究において指摘されている(杉村・安東, 2018; 猪田・久保木・塩津, 2019; 小嶋・堀・金子・野口, 2021)。本研究の結果から、シナリオを用いたリモート模擬保育においても、学生は多様な視点から子どもの姿を予想し、援助方法を想定できる可能性が示唆された。

次に、1回目のリモート模擬保育の振り返りレポートにおいては多く出現していないが、2回目には20位以内に入っていた語として、「工夫」「保護者」という語があげられる。表6と表7は、それぞれの語が出現していた文脈をま

表6 「工夫」が出現していた文脈（リモート模擬保育2回目）

<ul style="list-style-type: none"> <li>・3つ目は共感や感謝の言葉を忘れないこと、4つ目はハサミなど道具の配置の工夫である。</li> <li>・危険な道具を扱うときの工夫ができたと思う。</li> <li>・お面づくりのコーナーで工夫できたと思う。</li> <li>・年齢によってレベルを変えられるように工夫しておく、さらに幅が広がると思う。</li> <li>・関わり方をもっと工夫したいと思った。</li> <li>・みんなで工夫しながら前回よりもいいものを作れたため、良かったと思う。</li> <li>・少し工夫された対応も考えていきたいと感じた。</li> <li>・シナリオ上になった場合でも、表現方法を工夫して対応を考えていけたらいいと感じた。</li> <li>・全体的に、子どもが自ら考える時間を設けることで、主体的な活動ができるように工夫されていたと感じる。</li> <li>・今回のトントン相撲で工夫した、各土俵の素材を変えようという点をあまり生かすことができなかった。</li> <li>・他のコーナーの発表では、私にはなかった発想や工夫が見られ、勉強になった。</li> <li>・配慮事項やできないことが多くなってくと思うが、そこを乗り越え楽しめる工夫を考えることでまたよりよい学びにつながるのではないかと思う。</li> <li>・タコをもっと工夫する必要があったと感じた。</li> <li>・他のグループでは、パワーポイントに写真を貼って見やすいよう工夫されていた。</li> <li>・子どもが主体的に自ら考え取り組めるよう遊び方や学生の声掛けや援助が工夫されていた点がとてもよかったのではないかと感じた。</li> <li>・オンライン上での取り組みであるため、そのような工夫が必要だということを感じた。</li> <li>・どのコーナーでも意識して対応方法を工夫していることが見られたように感じる。</li> </ul>
--

表7 「保護者」が出現していた文脈（リモート模擬保育2回目）

<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だち同士や保護者者との掛け合いをもっと取り入れるべきだった。</li> <li>・保護者との関わりがあったコーナーがあった。</li> <li>・シナリオの中で保護者の方が登場するシーンがあった。</li> <li>・前回のシナリオあそび一やの反省点として、保護者の方を視野に入れるということがあり、その反省点を生かした。</li> <li>・保護者の方をシナリオに登場させた。</li> <li>・保護者の方との関わり方をもっと良いものにできたのではないかと感じた。</li> <li>・また、シナリオを考える機会があれば、ただ保護者の方を登場させるだけでなく、関わり方をもっと工夫したいと思った。</li> <li>・上手く活動に参加することのできない子どもや、保護者の方と離れることができないなど、少し工夫された対応も考えていきたい。</li> <li>・風鈴コーナーでは保護者とのコミュニケーションがあったりと、それぞれに良い特徴のあるシナリオあそび一やだった。</li> <li>・風鈴では保護者への声掛けを配慮するなど、私たちのコーナーにはなかった関わりがあった。</li> <li>・「リンリン涼しい風鈴作り」のコーナーで、保護者のことを意識した対応を考えていたことが良い点だと思った。</li> <li>・あそび一やでは、子どもの側で常に者の方がいらっしゃると思うので、子どもだけでなく、保護者の方も一緒に楽しめるような活動を考えたい。</li> <li>・子どもだけでなく、保護者の方も一緒に楽しめるような活動を考えたり、言葉をかけたりすることを想定したい。</li> <li>・保護者の方も意識した対応を心がけたい。</li> <li>・保護者を巻き込んで活動を行うことで、地域子育て支援活動もできた。</li> <li>・保護者のかかわりが最後の風鈴をつるすところだけで少ししかなかった。</li> </ul>
---

とめたものである。

「工夫」に関しては、表6に示されているように、「関わり方をもっと工夫したい」「声掛けや援助の工夫がされていた」など、関わり方、対応、表現方法、援助の工夫や、「タコをもっと工夫する必要があった」「写真を貼って見やすいように工夫されていた」など、教材を含めた環境構成の工夫への言及があった。対面ではないリモート模擬保育という状況の中で、多様な子どもの姿をイメージし、子どもが遊びこめるよう環境を構成し、積極的に関わろうと試行錯誤する学生の様子が窺える。

また、「保護者」に関しては、表7を見ると、「保護者の方との関わり方」「保護者の方も一緒に楽しめるような活動を考えたい」「保護者の方も意識した対応を心がけたい」といった記述がみられ、保護者支援という視点からの振り返

りがなされていた。

リモート模擬保育の活動内容は子どもの発達段階や興味・関心を考慮して企画されるが、地域子育て支援活動の目的は子どもだけでなく保護者への支援も含まれている。1回目よりも2回目のリモート模擬保育の振り返りにおいて、保護者に関するこのような記述があったことは、今回のシナリオを用いたリモート模擬保育が、保護者支援に関する重要な学びの機会になっているとともに、活動後の振り返りの重要性を示すものといえよう。

対面による模擬保育においては、活動後に行う振り返りが学生の指導技術の向上に有効であることが報告されている（高原・小川・瀧・矢野・下釜, 2014；高原ら, 2016）。本研究では、リモート模擬保育に関する振り返りが実際の保育場面での指導技術の向上に及ぼす影響については検討することができなかった。このような影響について検討することは今後の課題である。

### 共起ネットワーク

図1と図2は、最小出現数10回の語の共起ネットワークを示したものである。出現数が多いほど円が大きく、強い共起関係ほど円をつなぐ線が太い。

1回目の振り返りレポートの共起ネットワーク（図1）を見ると、「思うー考えるー今回ーシナリオ」といった強いつながりが見られた。学生のレポートには、「対面だと各コーナーに分かれての子どもとの交流であるため、他の人の良い場面があったとしてもそれを見ることはできない。しかし、シナリオであれば、他の人のやり取りを見て新たな発見が多くでき、勉強となった。」「子どもの言動をも考えたシナリオであったため、こういう時子どもはどうするか、どう思うかな、などと自分が子どもだと仮定して考えることができた。」「シナリオあそび一やを行うことで、落ち着いた状態で、冷静に子どもの特性に応じた行動についての対応を考えられた。その点が、この活動の強みであったと感じた。」「実際に活動していると、先生方へずっと見てもらっているわけではないが、シナリオあそび一やは、先生方からのアドバイスが的確に受けられた。学生たちだけでは気づくことのできない子どもへの関わり方について考え直すことのできる貴重な機会となった。」といった記述がみられた。今回のようなシナリオを用いた模擬保育活動であったからこそ学べたことや気づいたことに思いを巡らせ、振り返ることができていたといえる。

また、2回目の振り返りレポートの共起ネットワーク（図2）では、「工夫ー反省ー前回」に強いつながりがみられた。「これまでの反省点を生かして、子どもたちに会えるようになった時に柔軟に対応できる能力を身に付けていきたいと思う」「全体的に前回より良いシナリオあそび一やを作ることができ、自分たちの成長を感じた」「実際に対面であそび一やをしたい思いが強くなったように感じる」「みんな



緊急事態宣言時における武庫川女子大学子育てひろばの  
取り組み 学校教育センター紀要(6), 219-224.

上田紋佳・池田明子(2021) 保育者養成におけるオンライン  
授業による模擬保育の実践—テキストマイニングによる  
レポートの分析— 日本教育心理学会第63回総会発表論  
文集, PB031.

矢萩恭子(2013)2歳児保育室「あそびば『ほこあ』」におけ  
る成果と課題—保育実践力養成と子育て支援の相互機能  
の側面から— 田園調布学園大学紀要, 8, 79-102.

#### 【付記】

本研究は高知大学教育学部における令和4年度学部長裁  
量経費による補助を受けて行った。なお、本研究の一部  
は、「コロナ禍における大学生による地域子育て支援活動に  
関する学び—リモート模擬保育を通して—」(発表者:玉瀬  
友美、三ツ石行宏、川俣美砂子)として、日本保育学会第  
75回大会(オンライン開催)において発表されている。

